

野に仏・里に仏

大谷 眞

第一回目の旅・その二

真つ暗闇の山の中でお化けに出会う?

4月4日 薄曇り後晴れ

昨夜は一晩中寝つかれなかった。9時に床に入ってからとうとまとまどろみ、夜半に目覚めてからはまたうつらうつら。寝る前に飲んだお茶のせいだろうか?

5時半起床。あたふたと朝食をとった後、出発。昨日、金泉寺から乗ったJR「板野」駅まで列車で戻る。

ところで、このお遍路は完全徒歩をめざし、道中いつさいの交通機関を使わないことを自分なりに決めていた。ただし、必ずしもその日の最終地点で宿が取れるとは限らない。このように不可抗力でコースから外れなければならぬ時は、必ず前日交通機関を使用した地

点まで戻り、そこから再スタートすることにした。

しかし、この方法はどうしても時間的、金銭的なロスが多い。ありがたいことに、各寺の門前にはほぼ宿の便がある。したがって、寺から寺を一つの単位で考え、その日、何番まで歩くかを予定すれば、交通機関を使うことは最小限に押さえることができそうだ。ただし、春、秋のシーズンや、団体客の多い宿ならともかく、この時期を外れると、一人だと断られることがある、と聞く。したがって、歩ける距離を予測し、その最終地点に最も近い宿をいかに確保するかが、後々の最重要課題となった。

「板野」駅の改札を出て、昨日、駅まで急いだ道を逆にたどる。途中に大

日寺への標識を見つけ、ここから、民家の間の細い道を歩き始めた。昨日から気がついたことは、各種標識が多いこと。迷いそうな所には必ずと言ってよいほど現れる。昔ながらの遍路石のほか、赤いペンキ絵で描かれたお遍路さん、木々にさがる標識には、

「山河草木悉有仏性」

「お大師様と逢い、お大師様と語る。」

などとある。いずれも先人達のありがたい導き、と感謝。

午前8時半、第四番大日寺に到着。さらに30分ほどで第五番地藏寺。この日、第十一番藤井寺まで歩く予定にしていたので、何かと落ち着かぬ思いで、第六番安楽寺、第七番十楽寺、と次々にお参りをすませる。

第八番熊谷寺まで、また1時間あまり歩く。だんだん足が痛くなってきた。トレッキングシューズでは、アスファルトの道は堅すぎるのかもしれない。肩の荷もしだいに重さを増してきた。

昼を過ぎ、太陽は真上からじりじりと照りつけ

る形となった。アスファルトの照り返しも加わり、ひたすら暑い。えんえんと続くゆるやかな上り坂で完全にばてってしまった。ようやく坂を登り切って少し下ると、熊谷寺の屋根が見えて来た。桜か桃の花があちこちでほころび、目に優しい。疲れた体にはせめてもの慰めとなる。

「お参りを済ませ、納経所へ向かう途中、突然婦人から声をかけられた。バスお遍路さんの一人らしい。」

「あなた、何で回ってらっ

しゃるの？」

「歩いてお参りさせてもらっていますけど……」

背中ザックを見れば分かりそうなものだ、と思うが、はて？

「実は先程の安楽寺でもお見かけしたものですから。歩いて回られているなら、あまりに早すぎるのでびっくりして……。足を止めてごめんなさい。お気をつけてお参りくださいね。」

速足でバスのほうに戻る彼女を見送りながら、そうか、少しがむしゃらに歩きすぎたかもしれな

い、と反省する。それとも団体さんだから、もたもたしているうちに出発も遅れ、バスで小回りがきかない分、近くなら歩くほうが早い、という事か？

熊谷寺を出て第九番法輪寺への途中、田畑のど真ん中を貫く細い道で、先を行く歩きお遍路さんに追いついた。菅笠に真新しい上下の白装束、手っ甲に脚絆、足元には白い地下足袋、と完ぺきないでたち。白いリュックを背にして、杖をつきながら歩く後ろ姿は、ど



うも女性の二人組らしい。のんびり、ふわふわと歩いていられるので、追いつきすぎまに会釈するとかかなりご高齢のご婦人だった。

法輪寺でお参りを済ませ、次の第十番切幡寺までの4キロを、かなりくたびれながら歩いた。どうも午前中の無理がたたつたらしい。このペーすなら、今日は第十一番藤井寺までは無理な気がする。次の切幡寺から、徒歩でさらに約3時間はかかるってみていた。おまけに法輪寺から、手元資料に掲載がある藤井寺門前の宿に電話をすると「休業中」との事。資料以外の宿があるとは限らず、藤井寺まで足を伸ばすのがためらわれていた。

を口に詰め込んだ。疲れと足の痛みで何も考えない気がしない。やはり今日は第十番切幡寺で打ち止めにしよう、そう決めるから重い腰を上げた。切幡寺に近くなつてから、資料の中の民宿「坂本屋」をかるうじて予約した。門前の宿の前に来たものの、先にお参りしてから、と荷物を預けず通過する。ところが先延々と道は続き、おまけに最後は三百段以上もの階段を登るはめとなった。精根使い果たし切幡寺に到着する。

と言われた。それでも、私にとつて、このお遍路が確固たる信仰ゆえの苦行でもなく、ただのプータロウのふらふら歩き程度の認識しかない身とすれば、この言葉を聞くたび、身の縮む思いがした。

「坂本屋」まで戻り、部屋に通された後、明日の山越えの食料と、まめの手入れにと、赤チン、バンドエンド等を近所で調達した。宿に帰り、風呂に入つて出ると、既に夕食が始まっていた。十二人程の客で、3グループに分かれている。空いている一人分のスペースにもぐりこみ、一緒に食事をいただいた。

隣の3人組は、やはり歩き遍路と聞き知り、これ幸いと、明日にひかえた十一番からの山越えの情報を見せていただく。中の一人、リーダー格の男性は、以前雨の日に歩き、焼山寺まで6時間あまりかかった、と言つた。この道はあまりの険しさゆえ、「遍路転がし」と異名を取るのだが、他の二人の婦人も、今回初挑戦と



のこと。明日の最初の試練に、不安と期待で心はやるのは、どうやら私だけではなさそうだ。

本日は10時間歩いたことになる。寝る前、まめの手入れを済まし、日記を書いた。おなかの皮が突っ張ると、まぶたが緩むのは自然の理、8時には床に入る。

4月5日 晴れ（前編）

5時に起床。朝食までにトイレ、洗面を済ませた。7時前、女将さんが朝食の準備ができたことをふれて歩く。

階下の広間に行き、昨夜と同じメンバーで朝食をいただいた。中にかなりのご高齢の婦人がいて、皆さんにしきりに感心さ

れていた。付き添いの女性

が、彼女の持参している杖を示し、

「見てあげてくださいな、この杖。百歳の方が使っておられたのを、お遍路に行くからと貸していた

杖を追い越した。どうやら同じ宿だったらしい。夕食時、藤井寺からのコースを教えていただいた三人組は、後先が分からない。

「見ると一本の自然木から造られたものらしく、手にするところが根元に当たるのか、丸くコブのように膨らみ、それが長

第十一番藤井寺までの標識を見付け、見ると1キ口、4時間とある。3時間ぐらいかと思っただけに、ちょっと焦っ

た。田舎風の町並みを抜け、堤防にぶつかり、これを登ると広い川に出た。吉野川だ。川幅は広いが、水の流れる部分はさほど広くも無い。車一台がようつやく通れるほどの橋が架かるが、左右のガードは全く無く、車におびえながら恐る恐る渡った。さらに広い畑を抜け、また橋を渡った。静かな町並みを抜け、結局11時頃藤井寺に到着した。

お参りを済ませ、この先の情報を納経所で聞く。ここから焼山寺へは本堂横手からの本格的な山道となる。

「ゆっくり歩いてても8時間。早い人なら4〜5時間。まあ普通で6時間見ておいたらよろしいでしょう。途中、長戸庵、柳水庵、一本杉庵とあって、柳水庵が、ほぼ真ん中くらいですか。柳水庵はご住職がおられるので、電話で予約しておいたら泊まれますよ。」

「途中はずっと何も無い山道ですか?」
「そう、何にも無いですよ。」

礼を言ってから、「般若心経」を染め抜いた日本

手ぬぐいを買った。なにせ今回タオルも忘れて来たので、これが無いと汗をふくわけにもいかない。

しばらくベンチで休みながら、今日の宿を考えたら。柳水庵に泊まるとすると、時間的に少し早く着きすぎるし、焼山寺での宿泊は期待できない。(一人では断られた、と言う前例を聞いていた。)ふもとに下りてからの情報は手元に無し。ままよ、山の中ならどこでも野宿はできるだろう、と腰を上げたなら、先程追い越した婦人二人がやって来た。開口一番、

「やっぱりお若いから早いね。」

と言われる。もう若くはないつもりでも、彼女たちから見れば、確かに子供のような年齢かも知れない。互いの旅の無事を祈り、別れてからいよいよ山道にとりかかった。この後、あの二人も山越えをされるつもりなのだろうか?ふと、頭をよぎるが、まさか二人を背負ってこの坂を登るわけにもいくまい。

この先、延々と登りが

続き、大汗をかいた。手にする杖のありがたさが初めて分かった。2時間ばかり歩いた所で、最初の「長戸庵」に着く。一間四方ほどの小さなお堂だが、誰か住んでいるらしく、前の小さな空き地にはテントが張られていた。お堂の横にもタープが広げられ、その下にはまきと調理の形跡がある。その他、ラジオに懐中電灯、鍋釜に斧など、生活に必要な細々したものも雑然と並んでいた。それらが、苔むしたお堂と妙なコントラストを見せている。ふと見るとお堂の前に張り紙があり、

「レモンティーを飲んでいってください。これがわたしのお接待です。」

「要らないものを置いて、要るものを持って行ってください。」

とある。レモンティーとは、置かれている魔法瓶の中身の何か?誰も居ぬ間にいただくのは、さすがに気が引けてこれは遠慮した。賽銭箱の横にはカゴがおかれ、中に墨絵の仏様が描かれた色紙があつた。

「一人で楽しむ人は、さみ

しい時も一人ぼっち」と書き添えられている。100円玉を置いて、この一枚をいただいた。どんな人が暮らしているのか興味はあるが、残念ながら留守のようだ。お庵の前のベンチでしばらく待つが、あきらめてここを後にした。犬が一匹、人恋しそうにつながれたままだった。

少し行った木々の開けた所で道をそれ、シートを広げてお昼にした。魔法瓶の湯でスープを作り、簡単に昼食を済ませた。小一時間、ぼんやりと過

ごす。頭の中はほとんど真っ白な状態。それでいて、静かな充足感があった。汗でぼとぼとに濡れたシャツもここで着替えた。

ここからさらに一時間ばかり歩くと「柳水庵」の前に出た。山の中にしては立派なお庵だ。玄関には「飲み物あります。」と張り紙もある。中をうかがっているとおから上品な老婦人が現れた。「お茶でも飲んで行かれませんか？どうぞ、今入れますから。」

「ありがとうございますいま

す。・・・よろしかったら、お茶より魔法瓶にお湯をいただければありがたいんですが・・・。」

私の厚かましいお願いに、婦人は快くうなずき、ポットを手に奥へ消え、しばらくしてまた現れた。「こんな山の中でしたら、食料や日用品でお困りでは？」

今まで歩いて来た道は3時間、この道をポッカして毎日運ぶのだろうか？水はここに来るまでの手前、柳水庵奥の院「かしみ出す山の水がある。いえいえ、この家のすぐ



下に道が通っていて、買出しには困りません。」

たしかに後に地図で確認すると、今歩いているルートと直角に、麓からの道が一本交わっていた。その交わったところに、この柳水庵は位置しているらしい。

「こちらには泊まれると聞いたんですが？」

「ええ。でも今日は予約が多くて……。先程も二人、お電話いただいたんですが、既に今日3人の予約をいただいていたから、申し訳ないんですが、お断りしたんですよ。」

泊まれるのは3人まで、とのこと。二人とは先程の藤井寺のお二人だろうか。先の3人とは、もしかして昨夜の夕食時、今日の道を教えていただいた3人組の事かもしれない。

一息ついたところで、まきで風呂を焚く準備をされる婦人に礼を述べ、重い腰を上げた。

更に1時間ほど歩く。藤井寺からの道は山道とはいえず、ところどころ、石畳や階段が造られている。しかしその朽ちかたを見れば、かなりの歴史を感

じさせた。お地藏様がところどころに安置され、小銭が丁寧に供えられていた。

やがて広い石段の下に出た。見上げると、巨大な杉が天を仰ぎ、その足元には、大きな大師像が階下を見下ろしていた。「一本杉庵」だ。階段を上り切ると、向かい合った小さなお堂と、その向こうに、朽ち果てた民家が一軒、ひっそりとたたずんでいた。ここから道は下りのようだ。

時刻は既に4時。このまま下っても、焼山寺では5時を回るかもしれない。納経に間に合わず、かつ宿もとれないのなら、麓に下りて明日また登ってこなければならぬ。

それならいっそ、今日はここで野宿し、明日一番焼山寺にお参りする方が良さそうだと考えた。

お堂の中には畳も敷かれていたが、無断で泊まるわけにもいかない。鍵もかかっている。幸い、お堂の前にはベンチが二つ並んでいた。くつつければ簡易のベッドにはなるだろう。

着ているシャツを脱ぎ、

ベンチの背に広げて乾かした。ほっと一息ついてみると、どこかで声がした。はて、この山中で、と思う。もしかや今日、幾度となく聞いた空耳か、と考える間もなく、夫婦らしい二人連れが突然現れた。挨拶して、どちらからですか、と聞くと、麓に車を置いて、ここまで登ってきた、とのこと。

「お四国まわられているの？」

私の杖と白衣が目についたのか、奥さんの方が尋ねられた。

「はい。実は今夜はここで軒をお借りしようかと思っています。」

「そうねえ、ここならお大師さんと一緒だから寂しくなかないわね。」

そう言うてから、頑張ってね、と小さく微笑んで、また二人は下っていった。

暗くなる前に、と日記をつける。電気はここには来ている様子は無い。あとは簡単に夕食をとり、寝袋を広げ早々にもぐりこんだ。空はまだ、かろうじて明るさを残している。ふと気が付くと先程まで鳴いていたウグイスの声も消え、軽快にキツツ

キが木を打つ音も途絶えていた。ざわざわと木々を鳴らしていた風もいつの間にかやんでいる。目を開けると、大師堂のひさしと、一本杉のてっぺんと、向かいの小さなお堂の裏に生えるツバキの樹の先端が見える。今はすっかり薄暗くなった空に、これらが網

目模様になって浮かんでいた。心細さが頭をよぎる。キャンプの経験はあっても、今夜は露天、おまけにここは電気もない山の中だ。さつさと寝てしまわねば、とはやる気持ちが、余計にまた目をさえさせてしまう。

しばらくたって再び目を開けると、空はすっかり暗くなり、ポツンとひとつ、星が杉の枝にかかっていた。音も何もない、闇の一步手前の世界がそこにあった。日が落ちてから急に増し始めた寒気も、寝袋を通して、じわり、としみ込んでくる。このまま朝まで耐えられ

るのか？不安がムクムクと頭をもたげてきた。とにかく強引に眠ろうと努めた。

どのくらいたつたらうか、遠くで鈴の音を聞いた気がした。お遍路さんの持つ鈴の音のようだ。まさか、この闇の世界を

らに近づいているような気がした。恐怖が急速に心の中に膨れ上がった。それでもこわいもの見ただで、寝袋から少し頭をもたげ、そっと音の方向をうかがってみた。既に辺りは漆黒の闇に包まれている。鈴の音がやはり聞こえてくる。今は空



歩いて、今頃、山を越えるお遍路さんがいるわけではない。どうせ空耳だろう、と無理やり考えることにした。それとも、もしかして、藤井寺で別れたあのお二人が、今頃ここを越えようとしているのだろうか……。耳をすませると、またかすかに聞こえる。しかもだんだんこち

耳ではないことが、はつきりと分かった。体は縛られたように動かない。と、突然、闇の中に光が走った。一本杉のてっぺんあたりには、確かに光が走った。何の光り？！いよいよ出た！！！！